



教皇ヨハネ・パウロ二世から ベネディクト十六世へ

大司教 高見三明

教皇ヨハネ・パウロ二世は、教会の内外を問わず多くの人々に尊敬され慕われた、偉大な指導者でした。葬儀のとき教皇の棺が聖ペトロ広場を横切つて大聖堂に運ばれて行くとき、大群衆は拍手をして愛と感謝と賞賛の気持ちを表しましたが、その気持ちは痛いほどわかりました。

しかし、今わたしたちは、ベネディクト十六世という新しい牧者をいただきました。前教皇の精神を保ちつつも、新教皇と共に新たな歩みを始めなければなりません。

ところで、各教皇の方針は、その名前からうかがえます。ヨハネ・パウロ二世は、ヨハネ二十三世とパウロ六世

からその名を取りました。それは、これら二人の前任者の遺志を受け継ぎたいということの表れです。ヨハネ二十三世は、第二次世界大戦中教会を導いた。ピオ十二世の後継者として、1958年に教皇に選ばれました。戦後の世界が経済的に成長しても精神面の進歩が伴わない状況にあると見て、教会が自らを刷新して、現代世界に開かれ、奉仕し、共に歩むため、1962年10月から第一バチカン公会議を開きました。この大事業を、翌年パウロ六世が受け継ぎ、短命だったヨハネ・パウロ一世の後、さらにヨハネ・パウロ二世が強力に推進したわけです。ベネディクト十六世はどうでしょうか。

教皇ヨハネ・パウロ二世

教皇ヨハネ・パウロ二世は、全教会の牧者として、日本を含む130カ国、301教区を訪れ、人々に耳を傾け、牧者キリストの愛を示し、とくに貧しい人、病人、青年たちを心にかけてきました。「あなたたちはわたしの希望です」と語りかけられた世界中の若者たちは、今その呼びかけに応えつつあります。

一方、人間のいのち、人工妊娠中絶、女性司祭、同性愛者の結婚などについては、教会が使徒たちを通してキリストから受け継いでいる信仰の遺産に基づいて、明確な見解を示しました。またしばしば、「恐れないで！」と人々を力づけました。教皇の発言と行動は、キリストへの絶対的な信頼、聖霊の助けの確信、人間の尊厳への深い尊敬の念に貫かれていたのです。

ロシアによる祖国の支配、ナチによるユダヤ人の大虐殺などが背景にあったとしても、ヨハネ二十三世と同じ精神と具体的な行動で対話による平和の実現に努めました。広島での「平和アピール」は、今でも多くの人々の心に響き続けています。

一方、共産主義支配からの祖国の解放の動きを支持したため狙撃され

ましたが、その犯人をゆるし、しかも公に教会の過去の過ちを認め、ゆるしを願いました。さらに、他のキリスト教会との一致と諸宗教対話についても、パウロ六世の実践を具体的な行動で継承発展させました。

教皇ベネディクト十六世

教皇ベネディクト十六世は、学業に秀でており、1957年頃から77年までドイツ国内の主要なカトリック大学でも教義神学を教え、公会議においては35歳の若さでケルン大司教フリンクス枢機卿の神学顧問を務めました。77年教皇ヨハネ・パウロ二世によってミュンヘン・フライジング大司教に任命され、間もなく枢機卿に親任されました。その4年後に教理省長官と同時に教皇庁聖書委員会、国際神学委員会の委員長に任命され、教会の教えの面で教皇の右腕として働き、教皇が亡くなるまで務めました。「カトリック教会のカテキズム」編纂の仕事は特筆に価します。ちなみに、教皇として、6月28日、『カトリック教会のカテキズム問答』の発行を認可しました。その一方では、気さくで、大変心やさしく、ピアノ演奏を好む人間味あふれる方だとうかがっています。

ベネディクトの名は、第一次大戦勃発に先立ち戦争回避を訴えたベネディクト十五世と尊敬する聖ベネディクトからとられています。武力を用いた争いが絶えず将来の展望が不確かな現代に平和の重要性を思い、「祈りかつ働け」という聖ベネディクトの精神をご自分の霊性の基本にしておられるためと思われまふ。

とは言え、4月20日の最初のメッセージなどで、ほぼすべての点でヨハネ・パウロ二世の業績を引き継ぐと表明しています。すなわち第二バチカン公會議の教えを実践し続け、聖体を生活全体の源泉および頂点としながらペトロの後継者として教会の完全な一致を目指し、人間と社会の真の善を求めて諸宗教との対話を続け、若い人たちにも語り合おうと呼びかけています。とくに、キリストの光を人々の上に輝かせるために、教えと愛の実践において中心的役割を果たしたいと表明しています。8月の世界青年ケルン大会でもその存在感をいかに示しました。

ご高齢とはいえ、聖霊の導きのもと恵まれた才能と知恵を最大限に発揮してくださいるものと大いに期待したいと思います。同時に、教皇としての重責を十分に果たすことができるよう熱心に祈り続けましよう。

Q&A...

「ヨハネ・パウロ二世から

ベネディクト十六世へ」

Q. これまでは教皇様が替わられるといつてもどこか遠い世界の出来事だという印象を受けていたのに、今回だけは何となく身近に感じられるのは、亡くなられた教皇様が歴史上初めて長崎に來られた方だったせいでしょうか。

A. 確かにそうだと思います。24年前、羽田空港に降り立ち、大地にせつぶんして、「平和の巡礼者」として來日したのだと宣言されました。そして、あの広島での「平和アピール」や長崎での雪の中の「殉教ミサ」などの印象は、いままも強烈に残っています。教皇様のことを「パパさま」と呼び、父親として待ち続けていた日本のカトリック教会の歴史の一大節目となっただけではなく、カトリック信者ではない人たちにも強い印象を与えられたのではないのでしょうか。実際に、その後のマスコミの取り上げ方など

をはじめ、いろいろな分野で、日本人のカトリック教会への変化が見られるようになったと思います。「カトリック」といえば即ヨハネ・パウロ二世あるいはマザーテレサ、のイメージでとらえる方々も実際にいるほどです。

Q. 「ヨハネ・パウロ」という複合名の教皇様は歴史上二人だけだということもあつてなのか、とても新鮮な印象を受けましたが、今度新しく選出された教皇様は、「ベネディクト」という単一名になりました。その名前には何か意味があるのでしょうか。

A. 高見大司教様が一面に書いておられるように、1962年に現代教会のビッグバン（爆発的大刷新）ともいうべき第二バチカン公會議を始められたヨハネ二十三世の名と彼を引き継いでそれを完成されたパウロ六世



の名を複合させて名乗られた方が、「ヨハネ・パウロ一世」でした。

この教皇様の在位期間は約一カ月しかありませんでしたが、その教皇様を引き継いだ教皇様が同じくヨハネ・パウロ二世と名乗られ、現代教会の刷新を続けるというメッセージを、その名に込められました。

「ヨハネ」には「神は愛する」という意味が含まれています。「パウロ」はご存知のとおりペトロと並ぶ初代教会のリーダーであり、最初に異教徒の地にキリストの教えを伝えた方です。だからこの教皇様は、神の愛の宣教師として登場されたわけです。

初代教皇・ペトロの後に「ペトロ二世」を名乗る教皇はこの世の最後の教皇となるなどという伝説があるほどに、ペトロの名は永久欠番になっていますから、現代教会がそもそも原点に立ち返って抜本的な刷新を決意するための名としては、「パウロ」意外になかったとも言えるでしょう。

「ベネディクト」は本来「祝福されたもの」を意味することですが、今日の教会を祝福し、ベネディクト十五世にならって、公會議から40年経った現在の教会内の保守派・改革派などという複合状態をスッキリさせたい、というメッセージも込められているのではないのでしょうか。

Q・故ヨハネ・パウロ二世が現代教会に残された、特筆すべきものは何でしょうか。

A・故ヨハネ・パウロ二世の業績は、数えあげればきりがありません。とくに世界130カ国を訪問されたこと、二〇世紀の終わりにあたり教会の過去の過ちを謝罪されたこと、諸宗教間の対話の推進、わけても世界平和のために尽力されたこと、などは特筆すべきものだと言えるでしょう。

それらの中から長崎の教会が汲み取るべきことは、「行つて福音を・・・」というキリストの至上命令についての厳密な実践だと思えます。とくに「行つて」ということばのとらえ方が重要です。教皇様は、実際に130カ国にも行かれましたし、とくに晩年になってからは、病が重篤であるにもかかわらずその職務を全うされる姿を通して、自分を捨て「自分から出て行く」ことの、最高の模範を示してくださいました。

Q・故ヨハネ・パウロ二世が日本そして長崎に來られてから、来年(2006年)は25年目にあたります。何か記念行事等が予定されているのでしょうか。

A・いまの時点では、公式な行事として予定されているものはないようです。しかし、日本の平和憲法が脅かされつつある現在、25年前の教皇様の「広島平和アピール」は、ますます重要な意味を持ちつつあります。

「過去を振り返ることは、未来に対して責任を持つことです」という主旋律のよう

に四回も繰り返されたことばは、とても印象深いものでした。それは、原爆や戦争の過去だけではなく、長崎で「殉教ミサ」をささげて過去の日本の教会の姿を振り返り、未来に対する責任を担うかのように、あの西坂の丘を「至福の丘」と名付けて殉教の本来の意味と未来への示唆を与えられたこととも、深くかかわっています。

わたしたちも24年前にいただいたあの比類のないメッセージを振り返り、新しい教皇様を通していただけた「祝福」に感謝しながら、殉教的な証しでもある「福音宣教」に取り組んでいきたいものです。

今月、故教皇様の最後のプレゼントともいふべき「聖体の年」が終わり、教会は名実ともにベネディクト十六世の時代に入ります。聖体への感謝の気持ちを再確認しつつ、マザーテレサのいう第二の聖体拝領（人々への奉仕）に向かうことこそ、このたびの教皇様の交代に深い意義を持たせることになるのではないのでしょうか。



ベネディクト十六世の紋章

「参加する教会」をめざして (2)

キリストの使命への参与

はじめに

前回は、「参加する教会」とはどういうものかを、「キリストの友情への参与」という側面から考えてみました。そして今回は、そのもう一つの側面でもある「キリストの使命への参与」ということが意味するものについて考えてみたいと思います。

そういうことを言えば、すぐに、そのような大それたことなど人間である私たちにできるはずはない、ということばが返ってきそうです。しかし、本当にそうでしょうか。キリストは天に昇られる前に、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして…地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(使言1・8)と言われ、ご自分の使命を私たちが引き継ぐこと

ができるかと保障してくださったのです。

だから、この「キリストの使命への参与」という問題を、それほど難しく考える必要はないのではないのでしょうか。私たちはこれまでに、すでにそれをいろいろな形で行ってきているはずなのです。そこで、私たちがこれまで体験してきたことを、ごく身近な例から考えてみることにいたしましょう。

聖堂建設の例

明治以降の長崎教区では、いろいろなところに小教区や巡回教会などが次々と誕生していきました。そのきっかけとなったのは、ほとんどの場合が、「み堂」と呼ばれる聖堂の建設でした。

その聖堂の建設が行われるとき

には、多少の相違があるにしても、ほとんどのところでは、次の例と似たような状況のもとで、信徒全員による協力が行われていったのではないのでしょうか。

ある島の信徒たちは、聖堂から遠く離れた地域に住んでおり、毎週ミサにあずかることが無理なので、日曜日にはどこかの家に集まり、祈りをしたり教え方から要理を教えてもらったり、日常生活のさまざまなことについて話し合ったりしていた。ところがあるとき、ひとりの人が次のような提案をした。

「この島には、小さなみ堂が必要だと思う。近くにみ堂があれば毎週ミサにあずかれるし、これまでいろいろな事情で教会に行けないでいた人たちも、安心してそのみ堂に集まることができると思う。何とかな



黒島教会

らないものだろうか。」

そこで、みんなで話し合いをした結果、全員がこの提案に賛成した。そして担当者を決めて、建設計画や資金集めの方法などについての検討を行っていった。たび重なる話し合いの結果、新しい聖堂を作るのほども無理なので、空家になってい

る家を借り受け、聖堂らしく改造することにした。そして、建築関係の仕事をしている人が壁を無償で修理し、男たちは材料運び、婦人たちは食事の準備を担当することにした。若者や子どもたちも喜んで可能な手伝いをした。

作業を始めてから数カ月後、待ちに待った小さな聖堂が完成し、巡回教会となった。

この島の信徒たちは、その意識はなかったにしても、実はキリストの使命への参与を自主的に実践していたのです。みんなで協力しながら、キリストと共に神への賛美と感謝を捧げる聖なる祭儀を行うための聖堂を造り、キリストから伝えられた福音を宣教する共同体の、しっかりとした基礎を作り上げていったのです。



「キリストの使命」とは

(1) 神と人類との和解

キリストの使命の第一は、罪を犯して神から離れてしまっていた人類と神との和解を実現することでした。神の子が人間となり、人類を代表してご自分の命を捧げ尽くすことによって、神と人類との親しい関係を再び取り戻すことでした。そして彼は、その使命をみごとに成しとげてくださったのです。

(2) 「福音」の伝達

キリストのもう一つの使命は、神はすべての人間、すなわち例外なく一人ひとりの人間を心から愛して下さっているのだという、「よろこばしい知らせ(福音)」を苦しみあえいでいる人びとに伝えることでした。

福音書を手にした者は、その中のどの箇所でも、キリストがいのちをかけてその使命を果たされたのだということを確認することができます。キリストの人生のこま—こまは、「福音の伝達」以外の何ものでもなかったのです。

キリストの使命への参与

これらの使命を、キリストは、公生活の間ご自分と寝食を共にした弟子たちにお委ねになりました。そして、「わたしの記念としてこのように行いなさい」(ルカ22・19)、「全世界に行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ16・15)という遺言をもって、ご自分を信じるすべての人(全教会)にご自分の使命を世の終わりまで引き継いでいかせるようにとも命令されたのです。

初代教会の人びとは、この二つの命令を忠実に守っていました。しかし、時が経つにつれて、その時代時代で、どちらか一方により重点が置かれるようになりまし。よく考えると、この二つの使命は、別々のものではなく一体のものなのですが、そのことを忘れて、どちらか一方により重点が置かれるようになっていったのです。

20世紀の前半、すなわち第二バチカン公会議までの時代は、第一の使命のほうにより重点が置かれていたように思われます。特に長いあいだ迫害が続いて信仰を隠さなければならなかった長崎のキリシタンの子孫たちには、その傾向が強かったようにも思えます。

第二バチカン公会議は、「典礼憲章」や「教会の宣教活動に関する教令」などを通して、この二つの使命についての現代に即した刷新を呼びかけましたが、公会議全体としては、それまで不足がちだった福音宣教のほうにより重点が置かれたように思えます。この長崎教区の信徒の姿も、今では公会議以前とはすっかり様変わりした、宣教活動に励む生き生きとしたものになっています。

最後に、「教会の宣教活動に関する教令」発布25周年(1990年)に出された教皇ヨハネ・パウロ二世の回勅「救い主の使命」の序文の中から、現代における教会の使命についての、教皇の心からの願いが込められた一文を紹介させていただきます。

「教会にゆだねられている救い主の使命は、その成就からはほど遠い状態にあります。キリストが来られてから二千年がたとうとしています。人類全体を見わたすと、この使命はまだ始まったばかりであり、わたしたちはこの使命を果たすために、全力でかわらねばならないことがわかります……」

教会の前には、福音の種をまくために神によってよく準備された人類が広がっています。新たな福音化と諸国の民に宣教する使命に、教会のすべての力を傾けるときがきています。わたしは感じます。キリストを信じる者はだれでも、教会のどのような機関も、すべての人にキリストを告げ知らせるといふこの最高の義務を避けることはできないのです。」

〈シリーズ〉共に生きる信仰

パストラルケア

命に寄り添うケア(4)



心の叫び

現代人は、多かれ少なかれいろいろな不安感を持っている。さらに人間関係の破綻などを体験し、その結果、生きることのできない傷を負っている者が多い。そこでキリスト者である私たちには、このよきな心の叫びを聴くセンスが求め

られている。神学や教会の実践などは、こうした現代人の苦しみに適切に対応しているとは必ずしも言いきれない。そのような現実の中での、パストラルケアの課題は大きい。単なる身の上相談的な関与を超えた、その人の魂にまで届くケアが求められているのである。

もり かつし
盛 克志

レデンプトール会司祭

(臨床パストラル・カウンセラー)

いのちへの共感

私たちが苦しみに出会った時、その苦しみに共感してくれる人物を見つけることは大きな助けとなる。キリストの十字架を見つめる時、苦しみの中にある私のそばにいて、その苦しみを共感してくれている神がいることを実感することが出来る。共に苦しんでおられる神の無限の愛を発見し、私たちは豊かな慰めと生きる力をいただく。次のみ言葉は、すでに旧約聖書に記されている。

「彼らの苦難を常に御自分の苦難とし、御前に仕える御使いによつて彼らを救い、愛と憐れみをもって彼らを贖い、昔から常に彼らを負い、彼らを担ってくださった。」(イザヤ 63・9)

共感するのは、なかなか難しいことである。私たちが本当に慰められたと感じるのは、いったいどんな時だろうか。苦しい気持ちを誰かに話してみたら、それ以上相手の苦しみを話し返されるといふ経験をすることもあるし、苦しみの原因についていろいろと解釈

されたりすることもあることだろう。正論で説得されることもあるし、逆に表面的な同情心だけでの対応を受けてがっかりしたり、話した言葉が素通りしているような気持ちになったり、あまりに共鳴されて輪をかけて問題を大きくされたりして、ますます疲れてしまうこともあるだろう。

本当に共感してくれる人物とは、私の心のままに話させてくれる人、じっくりと耳を傾けてくれる人だということになるだろう。

以上のような現実の中で苦しむ私たちには、次のような心のかっとうがある。

◇生きる意味への問い

現代の日本人は、日常生活においては宗教への関心が希薄になつたように見えるが、人生のさまざまな困難に出会ったときには、宗教に救済を求める傾向も見られる。「何のために生きているのか?」、「なぜ生きなければならぬのか?」などの疑問は、人生の途上における究極の課題である。

◇苦難に対する問い

人間はさまざまな人生の苦難のただ中で、「なぜ自分は苦しむな

ければならないのか?」、このような苦しみには意味があるのだろうか?」などと問い続ける。理由の見出せない問いの中でも、それらの出来事を通して開かれていく世界があることを、共に見つけ出していくことが大切である。

◇ 罪責感からの解放

パストラルケアのテーマの一つに、罪責感、悔い、後悔、反省からの解放がある。自分の人生を振り返るとき、多くの人は反省や失敗、後悔で苦しむ。特に、癒されていない人間関係の中で許し合いがなされていかない場合には、かなりの苦しみが伴う。しかし、いままでの生き方を肯定し、許しへの道へと案内するのも、ケアの一つである。

◇ 死に対するセンス

死について考えるには、生を考え尽くさなければならぬ。生死が時間軸に沿って連続したものととらえるにしても、表裏一体のものと考えられるにしても、人の生き方は千差万別である。ある意味では死は一方的にやってくるものであり、やってきたものとの関係は、出会いとなる。

その出会いの中で、「死んだら

どこにいくのか?」、 「本当に天国や地獄はあるのか?」などと、現実のいのちだけでなく、死後の世界に対する思いが出てくる。そこで、その死後の世界のイメージを高めるケアも必要である。

◇ 明日への希望

明日に向かって希望を見つけ出すことは、重要な課題である。明日に希望があれば、人は今を生きることが出来る。どんな状況の中でも希望を持ち続けるなら、生きる意欲が心の底から湧いてくるものである。

共 感

「共感」とは、お互いに自分のところを相手のところに重ね合わせることである。例えば、相手と同じソファに座り同じ方向を見ながら、あなたも自分が体験しているかのように感じることはなからうか。このような意味での分かち合いは、人と人のかかわりにとって貴重な体験となる。

そのような「共感」には、次のような段階が考えられる。

共感の段階

①共に居ること

共感の段階の第一歩は、時間的・空間的・心理的に共に居る努力をし始めることである。どんなに暖かい援助の心があっても、距離的に遠く離れていたのでは、共感性を得ることは難しい。

②心を開くこと

「心が開いている」とは、どのような状態であろうか。それは、自分の今、ここでの気持ち・感情を表現できる状態のことである。自分の感情を伝え、相手の感情を感じる。そして、お互いが感情のやりとりをできる状態、それが心開いている状態なのである。

③相手のように

感じたいと願うこと
自己が確立されていないならば、相手のように感じることは自分を見失うことではないかという恐れに陥ることもあるが、自己の洞察が可能になるなら、相手の思いを感じ取れることもできる。

④互いに相手の存在を

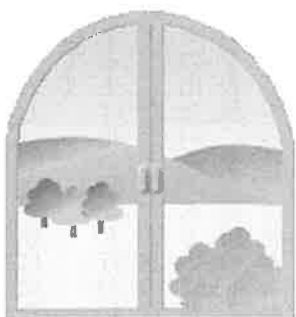
尊敬すること
共感の深まりは、共に生かされ

ている喜びへと変えられていく。そして、相手が固有の尊い存在であることを認めて、心の交わりが昇華され、相手の存在をありのまま受け入れることができるようになる。

人は受容され、理解され、共感されたと感じた時に、本当の意味で自分を生きることになる。

「共に生きること」(コイノニア)を目指すパストラルケアは、このようなプロセスを通した「魂の全人的ケア」を担っているのである。次のみ言葉は、まさしくこの現実をサポートしてくれるのではなからうか。

「主に望みをおく人は新たな力を得、驚のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。」
(イザヤ 40・31)



典 礼

豆知識



***ミサの初めにある「回心の祈り」の言葉を、もっとゆっくり唱えたらよいと思うのですが。**

「全能の神と兄弟の皆さんに告白します」という言葉が始まる「回心の祈り」は、「まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい」(マタイ5・23〜24)というキリストの言葉を実践する機会となっております。ひとことずつていねいに唱えることももちろんできますが、共同で唱える時はリズムがありますので、むしろ祈りの前の沈黙の時間を大切にするとよいでしょう。「・・・神聖な祭りを祝う前に、わたしたちの犯した罪を認めましょう」という招きの言葉の後、沈黙して心を見つめることで、それに続く祈りの言葉がしっかりと声を合わせて唱えられる(あるいは歌われる)と思います。

***朝晩の祈りを唱える時間には、目安がありますか？**

はつきりとした時刻よりも、朝なら「おはようございます」、晩なら「こんばんは」のあいさ

つが不自然ではない時間を考えればよいでしょう。特別な場合、たとえば長時間の飛行機利用等で朝晩がはつきりしない時などには、その時、朝(あるいは夜)を迎えている人々に心を合わせて唱えることもできます。



***聖堂に花を飾るとき、気をつけることがありますか。**

ローマ・ミサ典礼書の総則によると、四旬節には、祝日・祭日・第四主日をのぞいて祭壇を花で飾ることは禁じられています。待降節中はクリスマス当日よりも華やかになることのないように、慎みを持って飾るように、と指示されています。また場所については、祭壇の上を避けるようになっていきます。聖堂が花屋さんのよ

うになる必要はありませんし、祭儀の妨げにならないよう注意が必要です。
近年は典礼を表現する生け花の研究も行われており、福音のイメージ(たとえば、二本の百合の花を多用して夕刻を表現)や、秘跡のしるし(たとえば結婚式には二つの花器を組み合わせて一つの花を生け、一致を表現)が生け花と結び付けられています。

***ミサの終わりの「お知らせ」は、ミサと関係がないように思うのですが。**

理想を言えば、ミサと「関係がない」ことがらはない、ということになります。ミサが生活や教会の活動と無関係なのではなく、わたしたちが無関心でいることのほうが多いでしょう。「典礼は教会活動の頂点であり源泉である」とは公会議のことですが、聖書朗読や祈願文、共同祈願の意向などが、毎日の出来事とつながったものであるよう心掛けたいものです。

(嘉松 宏樹)



Catholic Archdiocese
NAGASAKI



マリアさまが「ストップ！」



日曜日の朝だった。長崎・聖母の騎士修道院内の聖コルベ記念館を開館しようとする中、白いシャツにネクタイ姿の男性から声をかけられた。

「ルルドへ行きます、駐車、いいですか」。コルベ館の担当者である私は、右手を上げた。

半時（はんとき）ほどすると、先ほどの男性が、事務室内の私を手まねきして呼んだ。

「話を聞いて欲しいのです」

（何事か？）と思いつつ、修道士の私は、彼を館内の資料室にさそい、2人は向かい合った。

男性は、おもむろに胸に手を当てて、「マリアさまが、ここから、離れんとです」と、異なることを言う。修道士なのに、どうも私は、そういう話は苦手である。心の内では、（幻想なのか、精神科行きか）。正直言って、そちらの方に判断が傾いたが、一応「マリアさまが、いつも居るのは、いいことですね」と、にこやかに応じた。

「五島に、ルルドがありますね」

「ああ、あります。玉の浦のルルドだね」

「その手前に、大きなマリアさまが立っているとです」

私には、すぐに理解できた。ルルドへ行く手前、国道の茂みの中に、昔、木造の教会があった。

『立谷（たちや）』の教会である。彼はまさしく、その場所を言っているようだ。今は教会は取り壊され、道端に模型の教会が置かれている。彼の話によると、教会跡に、台座を入れると、4～5mの両手を広げたマリアさまが立っているという。

「マリアさまを見上げたとき、強烈な印象を受けました。そのとき偶然、信者の男性がヤブの中から現れて、教会の由来を聞きました。その後、井持浦のルルドへ寄って、末期（まつご）の水を飲み、山道を登って、駐車し、大瀬崎灯台へ下って行ったとです」

灯台の先は、断崖絶壁になっている。最も危険な場所だ。前面には、雄大な、美しい東シナ海が開けている。飲み込まれそうな感じだ。そのとき、男性の顔が異様にゆがむのを見て取った。

「飛び込もうとした、そのときです」と、彼は思わず息をのんだ。「マリアさまの姿が、急に浮かんで来たとです。足がすくんで『もう一度、生きよう』と、強い力が沸き起こりました。ふしぎですね」

「ああ、よかった」と私は安堵した。「それで引き返すときは、どんな気持ちでした？」

「ルンルン気分になっていた」

「ヘー、下るときは坂だから楽なのに、足取りは重かった。帰りは坂道で苦しいのに、ルンルン気分だなんて」。2人は思わず苦笑した。

50代半ばの彼は、大阪で、リストラに合い、借金し、離婚し、絶望して、死に場を求めた。だが死に切れない。彼にとっては一生一代、まじめな話だ。故郷の五島なら清算がつかだろう。そう決心して、「日本の西の果てまでやってきたが、危機一髪のところで、マリアさまに助けられた」というのだ。

「それから、マリアさまが自分の胸から離れなくなるとです」

「なるほど」（これは単なる幻想じゃないな）

あれから3年が経過した。

彼は長崎市で就職し、見事に立ち直った。それからは、カトリック信者じゃないが、ひそかに聖母の騎士のルルドに通いつめているという。

「今年になって、何回ぐらい来ました？」

「10回以上になるでしょう」

私は嬉しくなった。人間は「生きていてこそ、やり直しができ、希望がある」と力説し、別れにしっかりと握手を求めた。修道士の手から、神さまのパワーが彼に伝わるのを願った。

「初対面なのに、もう、何年も会っている気がしますね」

「本当に、そうだね」。ネクタイ姿の男性は全く打ち解けて、またもや、ルンルン気分で見送られた。その日は、聖母月の第1日目であった。

（小崎 登明・おざき とうめい）





若者からの平和の発信

今年の8月、さまざまな平和集会在長崎で行われた。中でも「イスラエル・パレスチナ・日本、平和をつくる子ども交流プロジェクト」の長崎訪問は、「若者からの平和の発信」という確かな動きを感じさせてくれた。

日本の代表者として、長崎からは2名の高校生が選ばれたが、そのプロジェクトを陰で支えるスタッフとして、二つのミッションスクールの高校生たちが集まり、力強い協力者としてその使命を果たしていた。

今回は、この高校生スタッフの皆さんに、使命を終えた直後の感想をいろいろと伺ってみた。

▼ この使命をやり終えた今の感想は？

最初に準備に取りかかったのは10人だったので、だんだんと、内容が自分たちの考えていたこととは違ってきたり、アイディアが取り上げられなかったりして、止めていく人たちもいたので、結局7人が残りました。私も途中で何度も止めたかと思いましたが、最後までやり終えた時には、これまで頑張ってきた良かったと思えました。

代表者を支える立場の私たちは、きつとカヤの外だろうと思っていました。予想外と一緒に行動できて嬉しかったんです。特に、高校生交流会の最後にプロジェクトのメンバー全員で歌を歌う時私たちが壇上まで呼んで一緒に歌わせてもらえたのは予想外だったので、ビックリすると同時に、これほどまでに心に掛けてもらっていたのだと分かり、感激しました。

イスラエルやパレスチナなど、普段遠い存在だと思っていた国々の人たちと交流を持って、とても良かったです。

直接に出会い、聞いたことで、イスラエル・パレスチナについての興味や関心を持ち始めました。今は、よその国という感覚ではなく、関わりがある国という見方になってきているし、こういうつながりを持って、世界が広がった感じですね。

▼ 「平和」についての考え方はどうですか。

日本は安全なところなので、緊張がないなど「平和ボケ」をしていると思えるようになったし、「平和」についての見方が変わりました。

こうして友達の数が増えていけば、「平和の実現」も可能になるのではないかと、平和が近づいているのでは…、とも感じました。

イスラエル・パレスチナの代表者は、今まで過ごしてきた15・18年間も辛い経験をした人が多かったのだと思いますが、強いし、明るいし、特に私たちのことを気遣い、受け入れてくれたのは、この人たちだったので。

あの高校生交流会の場で、イスラエル軍から妹を殺されたパレスチナの人が、「私はイスラエルの軍人を許しません」と発言したことで、イスラエルの人たちはほっとしたと思うし、「忘れないけど、許せる」ということを言えるのはすごいことだと思えて、強く心に残っています。

「広島・長崎を見て、こんなにひどいことをしたアメリカ人を日本人たちが許しているのだから自分たちも変われるという希望が持てる」とパレスチナ人が言ったことは、私たちの希望にもなりました。今回の小さな体験のおかげで、私たちも少しずつ変われるようになるようになりました。

▼ 支えるスタッフとしての活動はどうでしたか？

初めは2人の高校生のサポート的な存在だということに納得しがたい面もあったのですが、やりながら、自分自身のためにもなっているのだとい

うことに気がつきました。

私たちの支援活動をさらに陰で支えてくれるスタッフも大勢いたし、「目立たない存在」に感謝したいと思いました。

一生懸命準備してきたことが、スケジュールのできなかったりしましたが、その準備を通して得たものは大きかったと思います。

よく準備したにもかかわらず失敗したりもしましたが、それを温かく包んでくれていた仲間があったことに、ほんとうに感謝しています。

▼ この体験をしたあなた方には

これから何ができると思いますか。遠いだけに別れるのが辛かったですが、絶対会える、会いに行きたいと思ったり、ここから平和を発信できるのだという希望も見えてきたように感じています。



インタビューを終えて…

二つの学校、二つの学年(2・3年)という壁を超えて仲良く協力した彼らのことばからは、「ここに平和の実現があり、ここから何かが変わっていく…」という予感と、若い力が確かにここに芽吹き育っている、ということを実感させられた。

〈委員会の動き〉

青少年委員会より..



ワールドユースデー

不安だった心が感謝の心になり、別れに涙する青年たちの姿が印象的でした。

第二部の「本大会」（16日～21日）では、過ぎ越しの聖なる三日間をモデルにプログラムが組まれていて、司教様方によるカテケジス（要理講話）が行われ、静かに黙想しながら過ごしました。夜の時間はフェスティバルが開催され、若者同士の交流がなされました。締めくくりは、教皇ミサです。広大な野原に前晩から徒歩で集まり、寝袋で野宿しながらのキリストを中心にした集いとなりました。

本大会中は、まるで避難生活のようにコンクリートの上に寝袋で寝たり、食事の配給がなかったり、押し寄せる巡礼者の混雑でミサに参列できなかったりという、非日常の環境の中で過ごしました。でも、だからこそ、そこから見えてくるものを青年たちが体験し分かち合うことができたことが、この大会に

参加した者がいただいたお恵みだったと思います。そして、このWYDはキリストに出会うための巡礼の旅だったといえるでしょう。

WYDという行事は、国連が1985年を「世界青年の日」と定めたことを受け、前年の「あがないの特別聖年」の閉会ミサで、教皇ヨハネ・パウロ二世が青年たちにローマに集うようにと呼びかけたことによって始まったものです。その後、教皇の提案を受けて、毎年「受難の主日」に「世界青年の日」を祝うようになり、隔年で世界大会が開催されるようになりました。世界中の若者がひとつになり、教会の本質であるキリストの受難と復活の神秘を味わうことを目的としています。またこのWYDは、教会や社会にとっても若者に目を向け、将来を担う若者に信頼と希望を置くことの大切さを確認するきっかけとなる、ともいわれています。

今回のWYDにアシスタント（青年への奉仕者として参加させていただいて感じたことは、「多様性の一致」ということです。改めて、世界は広いなあと感じさせられました。

いろんな違いがあります。国旗が違う、肌の色が違う、言葉が違う、国民性が違う、習慣が違う、文化が違う、考え方が違う、などなど。この違いは、日本の巡礼団の中でも感じました。そんな違いを持っている人々がキリストによって一つになる姿を見ることができ、肌で体験することができたように思います。とくに教皇ミサを通して、そのことを強く感じました。

青年たちは、この違いを乗り越えて一つになる特別な力を持っていました。そして、その青年たちの力を認め受け入れることが、青年たちに信頼と希望を置くための原点になるのだと思いました。

第20回ワールドユースデー（WYD）がドイツのケルンで開催され、日本からは公式巡礼団として300名を超える青年とアシスタントが参加しました。長崎教区からも17名の青年と5名のアシスタント（内4名は司祭）、そして高見大司教様がこの巡礼団に加わりました。

今大会のテーマは、「わたしたちはイエスを拝みに来たのです」（マタイ2・2参照）。ケルンの大聖堂には東方の三博士の遺物が敬虔な伝統に従って崇敬されており、東方の三博士と同じように世の救い主と出会ったために、全世界から100万人を超す若者が集まりました。

大会の第一部は、「出合いの日々」（8月10日～14日）となっていました。日本の巡礼団は、ルクセンブルグでホームステイをしながら過ごしました。ホストファミリーや小教区の方々の温かい歓迎を受け、



ケルン大聖堂へ向かう日本巡礼団

生活教会

明治の殉教

田ノ浦瀬戸を眼下に

臨み、中腹に建つ浜脇

教会堂。一九三二年建

立、五島最初の鉄筋コ

ンクリート造り。

久賀島の信仰の始まりは、

一五七〇年代の宣教活動によ

るといふ。往時、数多くの信

徒が生まれたが、永く厳しい

迫害によって、そのほとんど

が棄教した。

一八〇〇年代になると、五

島藩の政策により、外海から

信仰の自由と生活の安定を求

めて多数の信徒が移住し、密

かに信仰に生きていた。

明治元年九月、信仰表明に

端を発し、迫害の嵐が吹き起

こった。島内の信徒は捕えら

れ、六坪の牢に二百余名が押

し込められ、想像を絶する厳

しい責め苦に合い、幼児から

老人まで、四百人が殉教した。

その後、殉教と貧苦を乗り

越えた信徒たちは、一八八一

年、浜脇に木造平屋建の聖堂

を建立し、最盛期には、赤仁

田、永里、細石流、五輪にも

聖堂を建て、先達の信仰を継

承した。

殉教地の松ヶ浦牢跡・「牢

屋の碑」には、今、殉教記念

聖堂が建つ。ひっそりと佇む

聖堂は、近代の殉教とその信

仰、神と人との偉業を証しし

ている。



浜脇教会

フォトプラン 山本 富夫